

介護福祉学生の感染予防に関する知識・認知・態度

鈴木 圭子¹⁾

Evaluation of Knowledge, Acknowledgment, and the Attitudes of Nursing and Welfare Students Concerning Infection Control

Keiko SUZUKI

要旨

A短期大学介護福祉学科1年次生55名を対象とし、介護技術における単元学習前の学生のレディネス把握を目的として、無記名の質問紙調査により感染予防に関する知識・認知・態度を評価した結果、以下の事項が明らかとなった。

1. 媒介経路に関する項目では正答率は比較的高かったが、具体的な感染症罹患者のケアに関しては、正答率は低かった。
2. 感染予防に関する自己の知識について評価は低かったが、学習意欲は高かった。
3. 学生の感染症に関する認知・態度面では、不安と意欲という2因子があった。
4. 学習を深めるためには、新しい知識・技術を取り入れる学習意欲の維持や環境整備、思考能力と倫理観を育成する教育が必要であると考えられた。

キーワード：感染予防，介護福祉学生，介護技術

Summary

To observe the readiness of nursing and welfare students before they are introduced to a unit on caring technology, a survey was given to 55 first-year nursing and welfare students at a junior college, using an unsigned questionnaire that contained questions on knowledge, acknowledgment, and attitudes concerning infection control. The survey revealed the following:

1. For the questions concerning the transmission route, the percentage of correct answers was relatively high; however, for those on the specific care of infected patients, the percentage of right answers was low.
2. The respondents had low ratings on their knowledge of infection control but they indicated a strong desire to learn.
3. In the area of the students' acknowledgment and attitude concerning infection, two factors, anxiety and desire to learn, were recognized.
4. It was recognized that for nursing and welfare students to learn effectively, it is necessary to maintain their desire for learning by introducing them to new knowledge and technology, and to offer a type of education by which an ideal learning environment may be created and their thinking capability and view of ethics may be nurtured.

Key words : infection control, nursing and welfare students, caring technology

1) 介護福祉学科講師

I. はじめに

1998年に成立した「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」は、わが国の感染症対策に大きな変革をもたらし、本法成立により事前対応型の感染症予防と危機管理、感染者の人権などの特徴ある法体系が整備された。

過去、高齢者が利用する福祉施設や医療施設においては、利用者のMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）やインフルエンザなどの集団感染が問題となった経緯があり、感染予防対策は保健医療領域のみならず、福祉領域においても現在では利用者に必要な日常ケアとなっている。

感染予防に関する研究では、実践現場からの実践報告は多く、その他、医療職を対象とした意識調査、看護学生を対象とした教育に関する検討はあるが、福祉系の学生に対する感染予防に関する意識を調査した報告はみあたらない。そこで本研究では、講義開始に際し、学生の学習開始前のレディネス把握を目的とした質問紙調査を実施し、感染予防に関する知識・認知・態度を評価した。

II. 研究方法

1. 対象

調査対象者は、A短期大学介護福祉学科1年次生55名である。

質問紙の回収率100%、有効回答率100%であった。回答者は、男性8名（14.5%）、女性47名（85.5%）であった。

2. 調査方法

平成15年11月に、介護技術（5単位、年間授業時間150時間）の単元「医療対応時の介護」における小単元「感染予防」（2時間）の授業の一環として、無記名による質問紙調査を行った。

調査内容は、感染予防に対する知識・認知・態度面に関する12項目であり、回答選択肢を「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5段階リッカートスケールとした。

3. 分析方法

分析は、項目毎の単純集計、及び知識を除いた認知・態度面に関する8調査項目の因子分析を行った。なお、各質問項目の相関は高くはなかった。

4. 倫理的配慮

本調査実施前に、対象者に調査の目的、プライバシーの保護、調査結果を研究目的以外に使用しないこと、答えたくない質問には答えなくても良いこと、回答は成績に無関係であることを説明した。全ての対象者から同意が得られ、回答を得た。

III. 結果

1. 知識面

学生の感染予防に関する知識・認知・態度に関する調査結果を表1に示した。

表1 学生の感染予防に関する知識・認知・態度

		(N=55)				
		そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらとも いえない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
		人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
知識	疥癬は罹患者との会話で感染することがある	3(5.5)	7(12.7)	13(23.6)	14(25.5)	17(30.9)
	B型肝炎ウイルスは日常の介護現場で感染することはほとんどない	3(5.5)	13(23.6)	10(18.2)	12(21.8)	17(30.9)
	MRSAの罹患者へのケアには手袋が必要である	23(41.8)	16(29.1)	1(1.8)	10(18.2)	5(9.1)
	ケア従事者が感染症の媒体となることがある	35(63.6)	10(18.2)	8(14.5)	1(1.8)	1(1.8)
認知・ 態度	感染症を持っている人と接することは怖い	7(12.7)	25(45.5)	16(29.1)	2(3.6)	5(9.1)
	感染予防について興味がある	25(45.5)	15(27.3)	11(20.0)	3(5.5)	1(1.8)
	感染症は難しい	19(34.5)	20(36.4)	12(21.8)	1(1.8)	3(5.5)
	感染症罹患者から自分に感染することが不安である	29(52.7)	15(27.3)	6(10.9)	3(5.5)	2(3.6)
	正しい知識をもっていれば、感染症は怖くない	27(49.1)	14(25.5)	10(18.2)	3(5.5)	1(1.8)
	私は感染症に関する知識がある	0(0.0)	1(1.8)	5(9.1)	13(23.6)	36(65.5)
	私は感染予防のためのケアができる	1(1.8)	2(3.6)	11(20.0)	13(23.6)	28(50.9)
適切な感染予防対策ができるようになりたい	49(89.1)	5(9.1)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.8)	

知識では、「ケア従事者が感染症の媒体となることがある」という媒介経路に関する項目で正答率は81.8%と高かった。しかし、疥癬、MRSA、B型肝炎ウイルスなど具体的な感染症罹患者のケアに関しては、正答率はそれぞれ、56.4%、27.3%、29.1%と低かった。

2. 認知・態度面

感染症に関する認知・態度面では、「私は感染症に対する知識がある」「私は感染予防のためのケアができる」と現在知識があると回答した者は、それぞれ1.8%、5.4%と極めて少なかったが、「適

切な感染予防対策ができるようになりたい」、「感染予防について興味がある」と回答した者は、それぞれ98.2%、72.8%と学習意欲を示した者が多かった。また、「感染症罹患者から自分に感染することが不安である」(80.0%)、「感染症は難しい」(70.9%)、「感染症罹患者と接することは怖い」(58.2%)のように、不安を持つ者が多かった。一方で、「正しい知識をもっていれば、感染症は怖くない」と回答した者も74.6%いた。

認知・態度に関する8項目を因子分析(主因子法、バリマックス回転)した結果、2因子が抽出された(表2)。

表2 因子分析結果(主因子法、バリマックス回転)

(N=55)

因子名	因子1	因子2
不安		
感染症罹患者と接することは怖い	0.83	0.14
感染症は難しい	0.82	-0.06
感染症罹患者から自分に感染することが不安である	0.84	-0.07
意欲		
正しい知識をもっていれば、感染症は怖くない	0.13	0.72
適切な感染予防対策ができるようになりたい	-0.43	0.70
感染予防について興味がある	-0.16	0.66
私は感染症に関する知識がある	-0.01	0.44
私は感染予防のためのケアができる	0.13	0.42
	固有値	2.32 1.86
	因子寄与率(%)	29.01 23.22
	累積寄与率(%)	29.01 52.23

抽出された2つの因子はいずれも固有値1以上であり、「不安因子」と「意欲因子」と解釈できた。不安因子には、「感染症罹患者と接することは怖い」「感染症は難しい」「感染症罹患者から自分に感染することが不安である」が選択され、「意欲因子」には「正しい知識をもっていれば、感染症は怖くない」「適切な感染予防対策ができるようになりたい」「感染予防について興味がある」「私は感染症に関する知識がある」「私は感染予防のためのケアができる」が選択された。

IV. 考察

今回の調査結果では、感染予防に関する講義開始前には、学生の知識は少なかったが、学習意欲は高いことが示された。一方、「感染症は難しい」と7割の学生が回答していた。感染症はそれぞれ異なる感染源、感染経路、症状を持ち、実際のケアにおいては、それらを理解していることが前提

となるが、介護福祉士養成カリキュラムには自然科学領域の科目が少ない。したがって、授業の導入においては、身近な話題や具体的事象を取り入れ動機付けていくこと、また基本的知識と原則に関して理解度を確認しながら授業を進行していくことが必要だと考えられる。

学生の感染症に関する認知・態度には、不安と意欲という2つの因子があることが明らかとなった。過去、福祉サービス提供者は不安ととまどいのなかでケアを行ってきたことが指摘されている(高木, 2000²¹) が、今回の調査結果では、学生においても感染症に関する不安の存在が認められた。その要因として、知識未修得が大きいと考えられ、学習意欲を継続できるよう、教材や教授方法を工夫していくことが求められる。同時に、学生が対人援助職となるための適切な基礎教育を受けるために、その教育内容を検討していくことも重要である。

現在、介護技術において、感染予防に関する授業は限定された時間配分となっている。講義以外の学習の場として、看護学生が実習を通して感染予防の重要性を実感したこと、意識変化に影響を与えた要因に、「臨床指導者の行為」「手洗いや手袋等、手指に関する技術」などがあつたことが報告されている(窪田, 2004³⁾)。これは、現実的な応用を体験することでより学びが深まることを示していると考えられる。したがって、介護福祉領域においてもエビデンスに基づいた感染予防ケアが実践されることが求められるのは明らかであるが、介護実践の場が新しい知識や技術を取り入れていく環境にあることは、介護福祉士養成教育においても重要であると考ええる。

さらに、ある県内で高齢者福祉施設等を対象に行った調査の結果、調査前5年間でほとんどの施設で何らかの感染問題を経験しており、それらの施設責任者の問題分析によれば、感染またはその解決の難しさをもたらしている原因は、職員の知識不足、教育管理システムの未成熟、行政の対応不十分、対策のための財源や資源不足の問題という回答であつたことが報告されている(吉岡他, 2000⁴⁾)。このことから、介護福祉学生には、感染予防を含む必要な知識を身につけることが求められるが、同時に対策のための環境も整備される必要があると考える。例えば、病院など医療領域では、1996年にCDC (Centers for Disease Control and Prevention) から出されたガイドラインの中にスタンダードプリコーション (標準予防策) が示された。これは、日本においても病院でマニュアルを作成する際の指針となるといわれており⁵⁾、福祉領域において適用可能な要素を検討していくことも意義があると思われる。このような環境整備には、ケア従事者の資質向上のみならず、施設等の管理も関わってくるであろう。

社会・社会保障制度の変化や価値観の多様化、医療の進歩、人口構造の変化等に伴って、福祉や保健医療へのニーズは高まっており、ケア従事者が習得していかなければならない技術は今後も増加すると予想される。ケア従事者にはそれらの変化を察知し、対象者一人ひとりの尊厳を保証し、アドボケイトになれることが求められ、学生には、在学中や卒業後に専門職業人として、人権に関する価値・倫理を基盤とした知識や技術の応用ができることが必要とされる。そのためには、創造的に生活を支援できる感性に加え、日々の実践の中

でなぜこの状況でそのケアが必要なのかについてクリティカルに思考できる能力や倫理観を育成する教育が必要であると考ええる。

V. 結論

A 短期大学介護福祉学科1年次生を対象とし、単元学習前の学生のレディネス評価を目的として、感染症に対する知識・認知・態度を調査した結果、以下の事項が明らかとなった。

1. 媒介経路に関する項目では正答率は比較的高かったが、具体的な感染症罹患者のケアに関しては、正答率は低かった。
2. 感染予防に関する自己の知識について評価は低かったが、学習意欲は高かった。
3. 学生の感染症に関する認知・態度面では、不安と意欲という2因子があつた。
4. 学習を深めるためには、新しい知識・技術を取り入れる学習意欲の維持や環境整備、思考能力と倫理観を育成する教育が必要であると考えられた。

なお、本研究は、単元学習前の特定の短期大学学生を対象として得られた結果であり、一般化するにはさらなる研究が必要である。また今後の課題として、本調査は授業開始前の横断調査であり、他教科との関連及び教育効果についても検討していく必要がある。

最後になりましたが、本調査にご協力くださいました学生の皆様に感謝します。

引用文献

- 1) 阿彦忠之：感染症法の見直しに向けて—保健所長の立場から、公衆衛生, 64(4), p254, 2003.
- 2) 高木宏明, 院内感染対策委員会：地域ケアにおける感染対策, 医歯薬出版株式会社, 2000.
- 3) 窪田マキ：東京厚生年金看護専門学校紀要, 6(1), pp.36-39, 2004.
- 4) 吉岡洋治他：高齢者の保健・医療・福祉施設における感染症問題に関する調査研究, 看護管理, 10(11), pp.914-919, 2000.
- 5) 西岡みどり：海外の感染看護に関する研究論文, 看護研究, 32(4), p8, 1999.

参考文献

- 1) 池田理恵子：権利擁護－すべての人が最期まで人生の主役として尊厳を保てる福祉をめざして－，介護福祉，41，pp.7-24，2001.
- 2) 山崎美恵子，長戸和子：クリティカルに考える能力の育成 看護系大学における看護技術教育，インターナショナルナーシングレビュー25(2)，pp.36-40，2002.